

## 聖書のクリスマス物語について

大村 恵美子

昨今評判の高い映画「ライフ・イズ・ビューティフル」を見た。元来私は、極限状況に設定されたストーリーを、なるべく避けて通りたい人間で、ナチのユダヤ人収容所を舞台にした映画など、わざわざ見にくく気になれない。でも多くの人の評判を見聞き、またチャリティ映画にもなったので、切符を買って、なかば受動的に行くことにまでなったが、当日差し支えで行けなかった。しかしなおその後も、一般上映が続けられるのを知って、なにか因縁のようなものを感じ、結局見てきたのだった。

この映画の内容については、もう言わない。見たあと、私の心に湧いた思いについてのみ検証してみたい。現実をゲームとみなしたり、物語とわきまえたりして人生を生きるとは、どういうことだろう。この映画の題名となった「人生は美しい」は、死の追手から身を隠している最中のトロツキーの言葉だそうだが、また獄中のボンヘファーの多くの詩や手紙にも同様の気持ちが表現されている。

それらに一樣に見られるのは、じつは矮小な負の力のおろかしさに強いられた現実認識と、本当はそんなものではない、真実の生命と生活とが息づく保証があるという、より深い意味での実存信仰と希望との戦いである。「世のおろかな権力を笑いとばす神」への信頼である。

バッハの音楽の底流にあるのが、そのようなずっしりと重みをもった「恵みとまことにみちた神」 voll Gnad und Wahrheit への思いだと、私は見ている。

私たちは、今世紀、聖書学の深化のおかげで、クリスマス物語も、一言一句書かれてある通りを真に受けるのではなく、福音書が成立した時代の制約や、同時代やそれ以前の類似の物語・神話伝説などから受けた影響や、その他種々の条件を考えあわせながら、それらを駆使し、いかにもして後世に伝えたかった福音書記者たちの、「神の恵みとまこと」の現われに対する思いをこそ、受け取るべきではないだろうか。

目に見えぬものを信じる想像力を、人はよく逸脱とか軽薄とか受けとり、あるいは厳粛な事実に対する冒涇とさえ非難することもある。現実逃避とも容易に解される。しかし、人生の現実とは何か。人の誕生の実態を、死の実態を、確実に把握できたものがあるのだろうか。それが未だにわからぬまま、小手先の浅知恵でクローン生体をつくったり、延命法を試みたりしている。

生命の神秘を、暴力的な手段でこじ開けようとするかわりに、神秘そのものを受け入れて生きるのが、人間の想像力でありすなわち創造力である。それは人間に生きる希望を与え、実効のある力を与え、喜びを与える。

馬小屋の、暗くきたない片隅に横たわった小さな赤ん坊を拝みに、身分の卑しい羊飼いが来たり、遠国からえらい博士が来たりするという話。金ぴかの衣に包まれたり、薫り高い花々に囲まれたりした高貴な王子ではない（ヨーロッパの聖画の多くはわざと誤りを描いている）、裸同然のひよわな赤ん坊に託する尊敬と希望。ここを起点に、キリスト教会の天を突く大伽藍をはじめ、全世界を揺るがす権威の諸勢力は、自らの存在を一から問いただされなければならない。それらの跋扈する現世こそ、架空の空なる虚像だと断じるために、「クリスマス物語」も存在し、リアルに力強く描かれたバッハの音楽も存在するのだと信じたい。

毎年、新鮮な思いで<クリスマス・オラトリオ>演奏会に集うのも、こういうことであるう。

### オードコローニュ(ケルンの水)のように涼しげで健康な、 ゲプハルト先生との一タ

9月27日、18時30分、ゲプハルト牧師と南牧師が到着されてから、前号月報で予定された通りのプログラムをたどって、22時ごろの散会まで、盛りだくさんの一タがくりひろげられました。

1997年8月に、ケルンで先生にお会いした人も、この日初対面の人も、学生のように若々しくさわやかで、長身で伸びやか、明るく気品のある身のこなし、どこから近づいても信頼を感じるお人柄に、すっかり心がくつろいだようです。

**バザー** 後援会員の原田知子さんからドサッと届いた高価な品々、これが思いがけぬ大きな財源となりました。酒屋さんで見えてきた定価を半値以下にしたせいで、沢山の高級酒も完売となり、その他の品も、珍しく残ったものはありませんでした。ゲプハルト先生には、翌日のご帰国にそなえて、小さく軽く日本のおみやげ品コーナーで、南先生も大いに口添えしてくださって、用意の大きなビニール袋に、かなり入れていただきました。

**講演** ゲプハルト先生が牧師の道を選んで、39歳の今日に至るまでを、淡々とお話しいただきました。南先生の通訳の素晴らしさも手伝って、向学心にもえたゲプハルト先生が、恵まれた環境に育ちながら、いつも喜びをもってたどってこられた美しい経歴が、ごく自然な語り口で私たちの心をみたくれました。

**合唱** 先生をまじえての斉唱、合唱。私たちがドイツ語でよく用意してありましたが、ゲプハルト先生もソプラノ・パートを、出だしまごつくこともなく、しっかりと口を開けて歌っていらっしやいました。後でうかがったら、どの曲もちゃんと練習したことはないけれど、大体は知っていますから、とのことでした。時間の超過を気にしながらも、プログラムを全部歌いきり、ほんとうに楽しいひとときでした。



**会食** 「揚子江」のお座敷での会食では、問題なくお箸をつかって、おいしそうに召し上がる先生をかこみ、一人ひとりがあいさつをしたり、先生の選ばれたバザーの品を披露していただいたり、活発な交歓の場となりました。お若い先生は、「今晚は夜通しのつもりでいます」と南先生に言っていたようですが、明朝7時に宿舎を出発されることを思って、22時ごろにきりあげました。

この席上、パラビジョン企画の、来年8月26日から9月3日の、オーバーアンマーガウ「キリスト受難劇」鑑賞ツアーに先生をおさそいしました。早くから予定をたてれば考えられますと、かなり乗り気でいらしたので、「また来年にお会いしましょう」といってお別れすることができたのは、さいわいでした。実現を祈りましょう。

タクシーで大村夫婦が富坂キリスト教センターまでお送りしました。東京に到着された9月7日に、成田エクスプレスで新宿に着かれるのを南先生とお迎えして、富坂にお供し、近くのスーパーマーケットやパン屋やコーヒー店をごいっしょに探してから、今度は最後の晩にまた富坂にお送りし、先生はまだまだ残暑の厳しい東京に、オードコロニューのように涼しげで健康な残り香をのこして、去ってゆかれました。(大村恵美子)

#### 後援会員のお便り

大塚剛宏

ご活躍を千葉から拝見させていただいております。練習場が千葉から遠いのが残念です。ここ5、6年ほどIAEAの仕事でウィーンに行く機会が多く、オペラやオペレッタなどを楽しんでおります。

中里 威

10月9日(土)21時、NHKテレビ「ドラマ館」で、「オルガンの家」というのがあり、私たちの工房が舞台となって出ますので、見ていただければさいわいです。

Q：今回の定期演奏会「バッハのクリスマス音楽」のチラシの絵は何ですか？

A：シャンパーニュ地方ランスのカテドラルにある受胎告知の天使ガブリエル像(1250/1260)です。思わずつり込まれて微笑んでしまいそうですね。

—世代間の衝突—

**バロックに対する若い世代の反乱** 1730年代に、苦難と失望が相い次いだ。息子の一人、ゴットフリート・ベルンハルトが、24歳で死に、もう一人の息子、ゴットフリート・ハイน์リヒが愚行に走る。1737年、校長職に対する失望と家庭の試練に加えて、バッハはその芸術の基本的な方針に対して激しい衝撃を受けなければならなかった。

ハンブルクでは、同時代の音楽を分析の対象とする『批評的音楽家』と名付けた新しい定期刊行誌が現れたところだった。1737年5月14日の第6号で、バッハのかつての弟子の一人、シャイベが、論戦を開始した。「この偉大な人物が、その作曲にもっと心地よい特性を示し、もっと大げさでなく、わざとらしくなかったなら、もっと単純で自然な性格を持っていたなら、宇宙の驚異となったことだろう。彼の音楽は、極度に演奏困難である。というのは、彼は自分の能力を尺度にしているからだ。彼は、歌手や奏者が、彼自身の声や指で奏する楽器と同じ程度に達者であることを期待するのだ。」この批評は、彼らが古くさいと感じる音楽に反逆して、音楽の第一の目標を感覚のよこびと表現の単純さとにおく、新しい世代の代表者から突きつけられたものだけに、バッハにはこたえた。

バッハは、個人的に応答はしないと決めて、それを友人のJ.アブラハム、ビルンバウムらにまかせた。理論家のJ.マッテゾンやヴァイマルにいるバッハのいとこ、J.ゴットフリート・ヴァルター等、多くの音楽家たちがこの論戦に加わって、筆戦は盛んになった。今度の場合は、行政上の瑣事というだけにとどまらず、基底に達する争いになった。ヨーハン・セバスティアン・バッハは、もう過去の人間なのか？ ただし、少なくともこの論争には、バッハが同時代人の間で、もはや単に楽器の名人としてだけでなく、作曲家として最初に位置づけられたという長所がある。バッハは偉大な作曲家だが、もう過去の音楽的感性に属した人間だというわけである。シャイベによって口火を切られたこの論争は、次の世紀全体にわたって拡大され続けてゆく。

事実、それは、19世紀中葉のバッハ<再発見>によって、ようやく鎮静化を見出すことになる。

1738年、C.Ph.エマーヌエルは、プロイセン王子のオーケストラに加わる誘いを受ける。報酬は僅かなもの(300ターラー)だったが、アンサンブルは優秀なので、これは若いバッハにとって、やり過ぎわけにはゆかない好機だった。

イラスト(12)

室内楽トリオ。R.トゥルニエール作油彩画。

ディジョン美術館。

